

# 参加者の発話からみた会話への参加の しかたの違い

——多様な人間関係の4人によるカフェでの  
自由会話の分析——

大 場 美 和 子

## 1. 研究の目的

大学生活においては、初対面から始まって、様々な人と交流し、教師と学生、学生同士という社会的な役割関係だけでなく、授業やサークル活動を通して親しさが変化してくるといえる。この社会的な役割や親しさの違いに敏感に反応しながら、教師も学生も、会話への参加のしかたを調整していると考えられる。例えば、教師と学生という役割関係であっても、少人数のゼミを通して仲良くなったり、同学部の学生の中でもサークル活動を通して仲良くなったりすることが考えられる。学内で親しくなった場合、学内だけでなく、学外へ一緒に出かけることもあるだろう。学外へ一緒に出かけた場合、大学内の人間関係を維持しつつも、学内とは異なる場面へ参加することによって、学内とは異なる会話が展開する可能性もある。そこで、本研究では、教師と学生、親しさの異なる学生同士が、学外へ一緒に遊びに出かけた場面の会話に注目する。学外において、既に学内で形成された人間関係が、どのように会話への参加のしかたに影響するのかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究

### 2.1 実質的アクティビティと言語的アクティビティにおける発話の特徴

村岡 (2003 : 246-247) は、「日常生活において日本語非母語話者が参加する活動」を「アクティビティ」とし、「言語的アクティビティ」と「実質的アクティビティ」の2つに区分している。言語的アクティビティとは「相談や講義のように言葉によって成り立っている」もので、実質的アクティビティとは「スポーツや料理のように言葉以外の実質活動のルールによって成り立つ」ものであるとしている。そして、村岡 (2003) は、このような言語的・実質的アクティビティへの参加の条件の違いの分析をもとに、各アクティビ

ティの特徴の違いをおさえ、日本語教育の教室活動に取り入れていく必要性を主張している。

村岡（2003）を参考に、大場・中井（2007）では、日本語非母語話者（NNS）と母語話者（NS）が、電車に乗って買物にいくという一日の言語行動を、ICレコーダーを2人に装着することにより、7時間半にわたり、連続して録音収集した。そして、この言語的アクティビティ（電車内の雑談）と実質的アクティビティ（買物）における会話参加のしかたの違いを分析した。NNSの言語行動という大きな視野のもと、実際にNNSが日常生活で遭遇する生活場面まで調査対象を広げて各場面の会話の特徴を分析したものである。分析の結果、実際の生活場面の会話では、室内での会話と違って、会話の現場にある視覚情報が手がかりとなって話題が開始され、発話の対象となるものの現場性の有無<sup>1)</sup>が大きく関係していることが明らかになった。

さらに、中井・大場（2006）では、同じデータを使用して、言語的アクティビティと実質的アクティビティの中で交わされる会話の中で、発話の種類の違い（「事実の報告的発話」「評価的発話」）が会話・話題の展開のためにどのように用いられているのかを分析した。電車内の会話では、進行中の現場性有の情報提供の事実の報告的発話と評価的発話を契機として、進行中の現場性無の情報提供の事実の報告的発話が多く用いられることによって話題が展開していることを報告した。車内の雑談は、参加者がその場面にある物的リソースを利用して発話していることがわかる。

## 2.2 初対面会話における話題

三牧（1999a）は、大学の異学年という上下関係のある初対面会話を分析対象とし、情報交換の実態を量的・質的に分析している。分析の結果、話題のうち、「対称的な情報交換と非対称的な情報交換を半々に行なうよう巧妙にバランスをとっている」こと、さらに、話題の導入に関しては上位者が管理しているケースが6割であったことを報告している。一方、三牧（1999b）では、同学年と異学年の大学生の初対面会話における話題の分析を行い、総話題の95%が8つのカテゴリーに集約されることを報告している。三牧（1999a、1999b）から、初対面という相互の情報量が限られた場面においては、大学生は、どのようなことを話題として選択するのかということにはある程度の共通性があり、また、その話題の管理には学年が影響していることがわかる。

### 2.3 実質的な発話とあいづち的な発話

杉戸 (1987: 83-88) は、「発話」は「ひとりの参加者のひとまとまりの音声言語連続 (ただし、笑いや短いあいづちも含む) で、他の参加者の音声連続 (同上) とかポーズ (空白時間) によって区切られる」とし、この「発話」には「実質的な発話」と「あいづち的な発話」の二種類があるとしている。まず、「あいづち的な発話」とは、「[ハー]」「[アー]」「[ウン]」「[アソーデスカ]」「[サヨーデゴザイマスカ]」「[エソーデスネー]」などの応答詞を中心にする発話。先行する発話をそのままくりかえす、オーム返しや単純な聞きかえしの発話。「エーッ!」「マア」「ホー」などの感動詞だけの発話。笑い声。実質的な内容を積極的に表現する言語形式 (たんなるくり返し以外の、名詞、動詞など) を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的な働きかけもしないような発話。」であるとしている (杉戸 1987: 88)。次に、「実質的な発話」とは、「あいづち的な発話以外の種類の発話。なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含み、判断、説明、質問、回答、要求など事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話。」であるとしている (杉戸 1987: 88)。

以上の先行研究をもとに、本研究では、大学で出会った者同士が学外へ遊びにいくという言語的アクティビティと実質的アクティビティにおいて、人間関係と場面の違いに配慮すると同時にその場面を利用しながら、どのように会話に参加していくのか、参加者の発話の種類に注目して分析する。

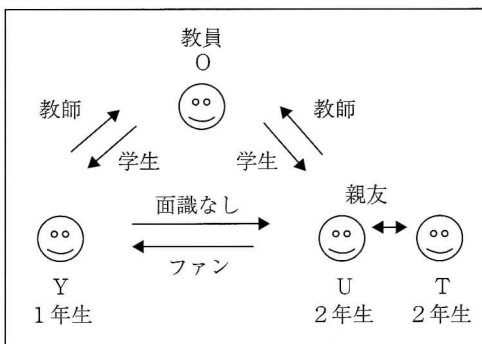
## 3. 調査の概要

会話データは、2007年9月、大学教員のOとその学生Y、U、Tの4人 (全員女性) が、学外へ一緒に出かけた際に収録したものである。待ち合わせの場所では出会ってから、カフェに入って退店するまでの言語行動を、ICレコーダーにより連続して収集した。データ収集時、Oは4月に着任したばかりであり、3人の学生はOの授業を前期に受講していた。しかし、Yは学部1年、UとTは学部2年で学年が異なり、Yの受講したOの授業とUとTが受講したOの授業は異なる。2年生のUとTは同じサークルに所属した友人同士であったが、1年生のYは2年生のUとTについては何も知らない。つまり、3人の学生は、学年と親疎関係において違いがあったといえる。表1ならびに図1に、4人の人間関係をまとめた。

表1：参加者の概要

参加者	社会的役割	他の3人との関係
O	教師	他の3人は前期の授業における学生だった。
Y	学部1年	OからUとTのことを聞いたが、面識はない。
U	学部2年	UとTは同じサークルで仲がいい。
T	学部2年	2人とも学内でYを見かけ、仲良くなりたいと考えていた。

図1：4人の人間関係



データの特徴としては、(1)人間関係の多様性、(2)場面の特殊性の2点が指摘できる。まず、(1)人間関係の多様性についてであるが、4人には、教師(O)と学生(Y、U、T)という社会的な役割関係、初対面(Y)と友人(U、T)という親疎関係の違いがあった。さらに、2年生UとTはもともと学内で1年生のYを見かけていてぜひとも話したいという高い期待を持っており、Oがその間を取り持つかたちで学外へ一緒に出かけるという設定であった。Yにとっては、本来なら同じ学年の1年生と一緒に一緒に出かけるはずだったが、その友人の都合がつかなくなり、知らない先輩の2年生と出会うことになっていた。つまり、3人の学生の間では相手に対する情報量と期待の違いがあったといえる (cf. Goodwin1981、大場2006)。

次に、(2)場面の特殊性についてであるが、4人が入店したカフェは、店員が客を主人として扱うという、日常性からはなれた役割関係を演じる場所である。通常の喫茶店とは異なる参加者の擬似的な役割関係により、言語的アクティビティの話題に影響を及ぼすことが予測される。なお、4人の中では、Yがいわゆる日本のポップカルチャーに詳しい存在であった。

## 4. 分 析

喫茶店に行って飲食をするという1つの実質的アクティビティは、入店と着席、注文の品の選択、注文と配膳、飲食、雑談、退店といった段階がある程度決まっていると考えられる。今回は、この段階の特徴が現れる入店と着席、注文と配膳の段階、人間関係の特徴が反映すると予測される雑談の段階を分析対象とした。なお、注文と配膳の段階では4人の注文、雑談の段階では3人の情報提供がなされている談話を選択した。

分析対象とした談話は、内容的にまとまりのある部分を抽出したため、時間と発話量は均等ではないが<sup>2)</sup>、前述の(1)人間関係の多様性、(2)場面の特殊性を記述するための質的な分析を行うものとする。分析対象としたのは、入店と着席で1つの談話、注文と配膳で4つの談話、雑談で5つの談話の計10の談話である。表2は、分析対象の談話に関する情報をまとめたものである。

表2：分析対象の談話の情報

段階	談話番号	開始時間	終了時間	対象時間	話題の内容
入店と着席	①	3:27	6:33	3分06秒	カフェの特徴。
注文と配膳	②	19:11	20:21	1分10秒	Tの注文の品の配膳。
	③	21:24	23:29	2分05秒	Yのお絵かきの注文。
	④	23:32	25:36	2分04秒	Oのお絵かきの注文。
	⑤	27:09	29:13	2分04秒	Uのお絵かきの注文。
雑談	⑥	35:59	38:11	2分12秒	3人の出会い。
	⑦	41:02	42:58	1分56秒	Yについて。
	⑧	44:48	46:09	1分21秒	Yについて。
	⑨	47:27	47:55	0分27秒	Tについて。
	⑩	49:03	50:38	1分35秒	Uについて。

表3は、各談話(①～⑩)における参加者の全発話を、杉戸(1987)の「実質的な発話」と「あいづち的な発話」によって分類した結果である。「実質的な発話」が「実」、「あいづち的な発話」が「あ」である。段階と談話番号は表2と同様のものである。各参加者の略記号は以下の通りである。

- O : 参加者 O (教師) の発話  
 Y : 参加者 Y (1 年) の発話  
 U : 参加者 U (2 年) の発話  
 T : 参加者 T (2 年) の発話  
 店 員 : 喫茶店員の発話  
 複 数 : 複数の参加者による発話  
 不 明 : 発話者が不明のもので、O、Y、U、T のいずれかの発話  
 サイド : 店内の O、Y、U、T 以外の客の発話、もしくは、この 4 人の  
 テーブル以外にいた店員の発話

表 3：各参加者の発話の種類別集計

段階	参加者別発話数																			
	①	O		Y		U		T		店員		複数		不明		サイド		小計		合計
		実	あ	実	あ	実	あ	実	あ	実	あ	実	あ	実	あ	実	あ	実	あ	実/あ
入店と 着席	①	23	6	4	0	8	4	8	3	22	0	0	4	1	3	0	0	66	20	86
注文と 配膳	②	4	2	0	0	3	0	7	0	10	0	0	1	2	0	0	0	26	3	29
	③	7	2	1	0	4	2	3	2	13	0	0	1	1	2	0	0	29	9	38
	④	11	1	2	0	9	1	6	1	9	3	0	0	4	0	4	0	45	6	51
	⑤	6	1	1	0	18	6	4	0	21	1	0	2	6	0	0	0	56	10	66
雑談	⑥	10	3	2	0	20	6	14	9	0	0	0	0	0	0	0	0	46	18	64
	⑦	13	1	7	0	17	9	11	6	0	0	0	0	0	0	0	0	48	16	64
	⑧	5	1	9	0	11	6	7	4	0	0	0	0	0	0	0	0	32	11	43
	⑨	1	0	1	0	3	4	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	12	6	18
	⑩	3	4	9	0	9	3	9	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	31	10
合計		83	21	36	0	102	41	76	30	75	4	0	8	14	5	5	0	391	109	500

表 3 より、3 つの特徴が指摘できる。まず、入店と着席、注文と配膳の段階において、店員の実質的な発話が多い点である（談話①で 22 発話、談話②で 10 発話、談話③で 13 発話、談話④で 9 発話、談話⑤で 21 発話）。このカフェでは、擬似的な役割関係を店員と客が演じるのが特徴であり、店員の発話の多さはこの役割関係を演じている結果であると考えられる。

2 点目に、教員である O の実質的な発話が他の参加者と比較して全体的に多い点が指摘できる。特に、談話①では学生の 3 人が 10 に満たない発話数

であるのに対し、店員の 22 発話と同等の 23 発話となっている。教員であるという社会的役割と、学生 3 人は親疎関係に違いがあっても、O 自身は授業で 3 人とも知っている存在であるため、上位者としての役割を強く意識し、発話が多くなっていたと考えられる。

3 点目に、3 人の学生 (Y、U、T) の実質的な発話の数が、談話によって変化がある点が指摘できる。1 年生の Y は 4 発話以下で全体的に少ないが、談話⑦で 7 発話、談話⑧で 9 発話、談話⑩で 9 発話にと増加している。2 年生の U は談話⑤⑥⑦、T は談話⑥⑦において増加が観察される。入店直後は上位者の O が会話の管理を行っていたものの (三牧 1999a)、話題によっては 3 人の学生も会話に参加するように変化していったものと考えられる。

以下、4.1 において入店と着席、4.2 において注文と配膳、4.3 において雑談の段階について、例をあげて特徴について述べる。会話の記述にあたっては、4 人の参加者は O、Y、U、T、店員は M とする。店員は複数いるため、「M1」「M2」のように番号を付した。また、発話者が不明の場合は「?」、明確ではない場合は「O?」のように発話者の後に「?」を付した。発話者が複数の場合、その発話者たちが明確な場合は「UT」のように符合を用いたが、特定できない場合は「3 人」のように人数によって表している。

#### 4.1 入店と着席の段階における会話参加の特徴

例(1)は、カフェに入店した段階である。「いらっしゃいませ。」(001)「何名様でいらっしゃいますか。」(003)という店員の挨拶は、他の喫茶店であってもよく聞く発話である。しかし、010 において、「お嬢様のお帰りで。」という店内における擬似的役割を提示する発話がなされる。これに O と U が反応して「お嬢様」を繰り返し (011、012)、T も笑っている (013)。この喫茶店において演じられる役割が発話によって提示され、それに参加者が関心を示していることがわかる。場面の特殊性が会話に影響しているといえる。

例(1)：カフェ入店 (談話番号①)

行番号	発話者	発話
001	M1	いらっしゃいませ。
002	O	あー。
003	M1	何名様でいらっしゃいますか。
004	?	(4 名で)。

005	M1	4名様でいらっしゃいますね、かしこまりました。
006	M1	禁煙席と喫煙席がございますが。
007	O	禁煙で。
008	M1	(禁煙で) かしこまりました。
009	?	( )
010	M2	お嬢様のお帰ります。
011	O	お嬢様↑。
012	U?	お嬢様。
013	T	((笑い))

(以下、中略)

例(2)は、入店後、テーブルについた段階である。4人はテーブル上にあるメニューやその他のチラシを見ながら話している。この喫茶店の珍しさのため、店内にある視覚情報を利用し、現場性のある発話(中井・大場 2006)が観察される。まず、Yが029において、卓上のチラシから「ポイントカード(てのがあるんですか)。」と店のサービスについて言及する。036と037ではUとTがメニューの値段をみて、「あっ高くない。」「うん意外と普通。」と述べている。Oも店の規則の説明を読み、「こ、これだって、他の人は駄目だからー我々は撮ってもらってーいいのかな。」と写真撮影の可否を確認している。一方、Yは、059においてメニュー内容をもとに、前日に調べた情報について述べている。現場のものを利用して、現場性無の発話で話題を展開(中井・大場 2006)しているといえる。以上の3人の学生の発話に対し、Oは必ず聞き手として反応を提示している(031、038、062、064)。表3においてOの発話数の多さを指摘したが、Oが教師としての役割を意識し、3人の学生それぞれに対応していたと考えられる。

さらに、店員が注文をとり4人のテーブルまで来ると、「お帰りのませお嬢様、失礼致します。」と役割を強調した発話を行う(066)。これに対し、またOは「あー。」と発話しており(067)、このカフェの特徴を意識していると考えられる。

例(2)：店内の様子(談話番号③)

行番号	発話者	発話
029	Y	ポイントカード(てのがあるんですか)。
030	U?	/ ほじゃー何の意味があるんかね。
031	O	/ ( ) 一つ追加いたします。
032	O	ポイントーを、会員になって何回でも来ますか。



033	T	うっふふふふ。
034	O	/ あっはははは。
035	T	いやー。
036	U	あっ高くない。
037	T	うん意外と普通。
038	O	ああーへえー
039	O	こ、これだって、他の人は駄目だからー我々は撮ってもらってーいいのかな。
040	U	あー。
041	O	まあせっかく来た記念にー。
042	U	((笑い))
043	U	思い出に残るね。
044	O	ね、そう(募集に)( ) (いれとったら) 普通に来たのねって。
045	3人?	((笑い))
046	O	こ、こっちからね。
047	O	ね折角ーの合コンだし。((笑い))
048	UT	((笑い))
049	O	うーんまーあのですね、あーあーのー3人分ぐらいなら私払いますからー。
050	T	/ いえいえいえいえ。
051	O	あー。
052	T	/ いいですよいいですよ。
053	U	/ それは大丈夫です。
054	O	熟読してー高いものをー食べる。((激しく笑う))
055	TU	((笑い))
056	O	いやーさっきお金おろしてきたから大丈夫。
057	T	いえいえいえ。
058	U	/ ( )。
059	Y	そういえばさきのうーネットで調べてきたところによると、なんか。
060	O	/ うん。
061	Y	うーん、キャラメルなんかかって ( ) ホットケーキだったらあ。
062	O	/ キャラメルなんか。 / うん。
063	Y	( ) (サービス) してくれるって ( )。
064	O	サービスしてもらえる。
065	U	/ へー。
066	M2	お帰りなさいませお嬢様、失礼致します。
067	O	あー。

(以下、中略)

#### 4.2 注文と配膳の段階における会話参加の特徴

このカフェでは、料理によっては店員がチョコレートやケチャップで絵を描いてくれることがある。例(3)は、注文した料理が運ばれてきた段階である。まず、店員が145と146で絵の希望を聞くと、U、T、Oはそれぞれ関心を示す(147、148、149)。さらにOはどのような絵が可能なのか情報要求

も行なっている (150)。また、笑い (153、155) や笑いに類似した発話 (159) も観察され、店員からの働きかけを利用し、参加者全員がカフェでのやりとりに関心を提示し、楽しんでいるものと考えられる。

また、155 において O は「それにしてください。」と言って笑い、Y のお絵かきの注文を冗談で決めてしまう。表 3 でも、Y の発話数は他者より少ないことを指摘した。Y がなかなか積極的に話さないため、O が教員としての役割を意識して働きかけたものと考えられる。

例(3)：Yのお絵かき注文(談話番号③)

行番号	発話者	発 話
145	M1	こちらの( )はチョコレートでお絵かきさせていただきます。
146	M1	何かお絵かきにご要望などございませんでしょうか。
147	U	要望きいてくれるんだ。
148	T	ほー。
149	O	ご要望ー。
150	O	どんなご要望があるんですか↑。
151	M1	そうですねーあのーねことかーそれとお嬢様のお名前もありますね。
152	M1	( )。
153	U	((笑い))
154	O	これーはないですね。
155	O	それにしてください。((笑い))
156	U	先生がきめとる。
157	M1	では( )。
158	O	((笑い))
159	T ?	ほほほほ。
160		[7秒]

(以下、中略)

#### 4.3 雑談の段階における会話参加の特徴

この雑談の段階では、飲食も終了しており、店員の参加は見られない(表3)。4人の言語的アクティビティが中心となる。

例(4)は、2年生のUとTが、1年生のYに対して興味を抱いた理由を話している場面である。まず、Oが「ここはもっとしゃべらないんですか↑憧れのー。」と3人が話すことをうながす(334)。Oの教師としての役割意識による話題の管理であると考えられる。これにUとTが躊躇していると(335-338)、Yが「なんで憧れなのかわかんない。」(339)と、自分に対する2人の肯定的な感情に疑問を提示する。これを受け、UとTが説明を開始す

る (342-378)。表3において、談話⑥のUの実質的発話は20例、Tは14例となっていたのは、Yの疑問に対し必死にUとTが情報提供を行っていた結果であるといえる。359から375では、TとUが説明をしているが、特にUが、361-365、368-372において発話のスピードもあげて一度に説明をしている。

例(4)：Yを見かけたことについて (談話番号⑥)

行番号	発話者	発 話
334	O	ここはもっとしゃべらないんですか↑憧れの一。
335	T	/ ((笑い))
336	U	/ ((笑い))
337	U	しゃべりたくない。
338	T	やー。
339	Y	なんで憧れなのかわかんない。
340	T	やーなんかー。
341	O	/ ねー。
342	U	オーラが違ったんよ。
343	U	[0.5秒] ねえ、すぐ発見できるよね。
344	T	そうもうあってんで。((笑い))
345	O	じゃあ一目ぼれじゃないですか。
346	U	/ ((笑い))
347	Y	じゃあ一学期とか前期は結構みかけられてたんですかね。
348	U	3回くらい見ましたよ。
349	T	うちもそんなくらいかな。
350	O	[0.5秒] どこら辺で見かけたんですか。
351	U	ヒノハラかねー主に。
352	T	あ、ヒノハラー。
353	U	ヒノハラの前だとかー。
354	T	/ ヒノハラで、なんか助けてあげてた一のをー高校生を。
355	U	/ あっ見ました。
356	U	見た見た見た見た。
357	T	/ ((笑い))
358	O	なんか人助けしてたんですか。
359	U	オープンセミナーで [0.5秒] あのー高校生が食堂で食べようとしてたんですけど。
360	T	食べ方が分からないんですよ。
361	U	そうカレーそば頼んで、カレーの方に並んでたんですよそばーの方なのに＝
362	O	/ あー。
363	U	＝で、それがわからないでウロウロしてたら、Yさんが、いやこれはこうこうして＝
364	O	/ なるほどなるほど。
365	U	＝こうこうなんだよ、こっちに並びなさいって。
366	T	うちらは結構無視してたんですけどー自分たちだけでもうさきさき行って。
367	U	/ ((笑い)) / うん。

368	U	いやーわかるよーって思って、うちもオープンセミナー受けたからー＝
369	T	／そうそうそう。 /((笑い))
370	U	＝どうにかなったから、いや：いっかって思って、でも Y さん助けよったけー＝
371	T	／うん。
372	U	＝あーえらーいって思って、ちゃーんと 2 人でーT と食べながら、えらいねーあの子はって、
373	T	／えらーいって思ってー。
374	T	そーう。 ((笑い))
375	U	名前知らないんで、あのメガネの子って。
376	T	うーん。
377	O	あーその時点では名前は知らなかったんですね。
378	T	まだわかんない。

(以下、中略)

例(5)は、O に促された結果、趣味の話をして3人がしていたところ、店内の他のテーブルから「萌えー。」(568)といったのが聞こえてきたことに、4人が興味を示した場面である。現場の聴覚情報を利用して話題が転換し、「萌え」の語源についての話題となり、ポップカルチャーに詳しいYが説明を開始する(592)。表3において、談話⑧のYの実質的な発話が9例と増加していたのはこのためである。大場(2006)は、接触場面と母語場面の三者会話では、ともに参加の状態は不均衡であり、母語場面においては参加者の話題に対する情報量の違いが影響することについて指摘した。表3より、Yは他の参加者に比べて発話数が少ない傾向にあったが、例(5)のように、得意分野の話題になれば、積極的に発話して会話への参加を提示していたといえる。

例(5)：「萌え」の語源(談話番号⑧)

行番号	発話者	発話
560	Y	漫画は何が好きですか。
561	T	えー [1.0秒] いろいろかなり。
562	Y	( ) 最近一少年系、ジャンプ系ー。
563	T	／あ少年ー / ジャンプ系。
564	Y	( )
565	O	おー。
566	Y	名前(言ったら )。
567	T	／あなんとなくうっすら。
568	M1	萌えー。
569	Y	あとーなんか。
570	U	((笑い))

571	Y	なんかこうー ( ) もえちゃんって ( ) ああいう、なんだろ (ああいう )。
572	O	ふーん。
573	U	んー。
574	Y	でー ( ) 萌えーみたいなの。
575	U	あーも、もえちゃんみたいなの。
576	O	あーなるほどね。
577	U	/あー。
578	U	ん↑。
579	U	今うち聞いた。
580	T	なんと、え↑え、なんてなんつった。
581	U	/もえー。
582	Y	もえって。
583	T	( )。
584	U	メイドさん↑。
585	T	いつ。
586	U	今今今、今。
587	O	( )。
588	U	萌えって意味をメイドさんから聞きたいね。
589	T	ん↑。
590	U	萌えって意味をメイドさんから聞いてみたいですね。
591	T	/おーあーそれは、確かに。
592	Y	( ) マンガのキャラクターの名前 ( からきてる )。
593	T	へー。

(以下、中略)

## 5. 考 察

大学内で知り合った教師と学生の4人がカフェに行った場面の会話における発話を、杉戸(1987)の「実質的な発話」と「あいづち的な発話」によって分類し、4人の会話への参加のしかたの違いを分析した。表3の集計結果からは、4人の発話数にばらつきがあり、参加の状態が不均衡(村岡2003)であったことがわかった。これは、4人の社会的な役割関係(教師と学生)と親疎関係(初対面と親友)の違いが影響していたと考えられ、各参加者は、いつ、何者として話すか調整を行っていたものと考えられる。

実際に会話例を検討した結果、次の3点が指摘できる。まず、非日常的な役割関係を演じる喫茶店に4人が関心を示し、会話に参加していた点である(例(1)(2)(3)(5))。店員の発話、店内の視聴覚情報という現場性の情報を利用して発話し、さらに、現場性無の発話を行なうことで話題を展開している例も観察された。人間関係が複雑であったものの、場面の特殊性を生か

して4人が会話に参加していたものと考えられる。

次に、社会的な役割関係の違いから、Oが教師としての役割を強く意識し、実質的な発話によって積極的に会話に参加し、話題を管理することを行っていた点が指摘できる(例(2)(3)(4))。社会的な役割と親疎関係という人間関係が複雑な多人数会話において、4人が楽しくすごせるように気を遣っていたと考えられる。学外のアクティビティであっても、学内における上下関係の明確な社会的な役割はそのまま保持され、会話への参加のしかたにも影響を及ぼすことがうかがわれる。

最後に、3人の学生の「実質的な発話」の増加に注目すると、話題に対する情報保有者であり、話すことが期待される場合は積極的に会話に参加していたといえる(例(4)(5))。本研究の会話は、三牧(1999a, 1999b)の初対面会話と違って、参加者の一部が初対面と友人という親疎関係の混在、異学年という上下関係が混在している。さらに、参加人数による相互行為の複雑性(Kerbrat-Orecchioni2004、大場2006)もある会話であった。人間関係や人数によって役割交替が複雑であっても、情報提供を行なうべき者としての役割を期待され、実際にその役割を意識した場合は、積極的に話していたものと考えられる。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、学外に出かけた教師と学生3人が、社会的な役割関係や親疎関係の違いがあるものの、人間関係や喫茶店の特殊性を利用しながら、会話への参加のしかたを調整している点を、発話の種類の違いから分析を行なった。今後の課題としては、スタイルシフトの分析と発話の方向の分析を合わせて行なうことが指摘できる。人数と人間関係による複雑性があつたのにもかかわらず、4人が楽しくすごすことができたのは、各参加者が自らの参加の状態を妥当なものであつたと評価できたことが背景にあるものと考えられる。今回のデータでは、参加者間に学年や親疎関係の違いがあり、特に学生である3人は、デス/マス体かダ体どちらを使用するか、調整を行っていた。誰が誰に発話を向けていたのかという発話の方向の分析とスタイルシフトの分析をあわせて行なうことで、親しさの変化が観察されることが考えられる。

## 文字化の規則

。	発話の終了。
、	ごく短いポーズ。
( )	聞き取り不能発話。
/	発話の重なる位置を示す。
(( ))	笑いなどの非言語行動。
↑	直前の音節の上昇。
—	直前の音節の延長。
[秒]	沈黙の秒数。
=	発話が続くことを示す。

## 注

- 1) 「現場性」の概念は、南（2003：134-135）の談話の中の伝達様式に関わる「現場／非現場」の対立を参考にした。
- 2) 店内の音楽や雑音により、収録データの全体の聞き取りは困難であった。

## 参 考 文 献

- 大場美和子（2006）「三者間グループ会話場面での unaddressed recipient の役割——接触場面と母語場面における会話参加プロセスの分析——」村岡英裕編『多文化共生社会における言語管理——接触場面の言語管理研究 vol.4——』千葉大学大学院社会文化科学研究科 pp.37-56
- 大場美和子・中井陽子（2007）「接触場面における一日の会話の分析——IRF の枠組みからみた会話への参加のしかた——」南雅彦編『言語学と日本語教育 V』くろしお出版 pp.123-139
- 杉戸清樹（1987）「発話のうけつき」国立国語研究所『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相－座談資料の分析』三省堂 pp.68-106
- 中井陽子・大場美和子（2006）「場面別の行動にみる事実の報告的発話と評価的発話の分析——接触場面における一日の会話データをもとに——」『社会言語学会第 17 回大会発表論文集』社会言語学会 pp.142-145
- 南不二男（2003）「第 6 章 文章・談話の全体的構造」佐久間まゆみ（編）『朝倉日本語講座 7 文章・談話』朝倉書店 pp.120-150
- 三牧陽子（1999a）「初対面インターアクションにみる情報交換の対称性と非対称性——異学年大学生間の会話の分析——」吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会編『日本語の地平線 吉田弥壽夫先生古希記念論集』くろしお出版 pp.363-376
- 三牧陽子（1999b）「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー——大学生

会話の分析——』『日本語教育』103号 日本語教育学会 pp.49-58

村岡英裕 (2003) 「アクティビティと学習者の参加——接触場面にもとづく日本語教育アプローチのために——」 宮崎里司／ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育 ネットワークのインパクト』明治書院 pp.245-259

Goodwin, C. (1981) *Conversational Organization: Interaction Between Speakers and Hearers*. Academic Press

Kerbrat-Orecchioni, C. (2004) Introducing polylogues. *Journal of Pragmatics* 36 pp.1-24

## 謝 辞

本稿は、2008年8月10日に行われたオープンキャンパスでの実演コーナー「会話分析を体験しよう！——“萌え～”なカフェにおける会話録音データの分析紹介——」における発表をもとにしています。この実演コーナーでは、上野順子さん、田島恵里子さん、山本麻琴さんが、本研究でのデータの分析結果を発表してくれました。特に上野順子さんは、ゼミでの学習をもとに文字化を精緻化してくれました。本当にありがとうございました。また、当日は、小濱有紀子さん、篠田尚未さん、竹本美由妃さん、田中粧子さん（以上、五十音順）が発表をボランティアでサポートしてくれました。特に篠田さんは衣装にも力を入れて活躍してくれました。本当にありがとうございました。本稿は以上の学生のみなさんのあたたかい協力のおかげでまとめることができました。なお、上記のオープンキャンパスの様子は、中国新聞大学ナビ この先生に教わりたい！「会話が文字になったら何が見えてくるんだろう」にも紹介されました (<http://www.daigakunavi.jp/Interview/HJU/08/09ooba.html>)。